

《総合診療ボックス》 症状でみる子どものプライマリ・ケア

加藤英治 著

＜書評者＞ 橋本剛太郎（はしもと小児科クリニック院長）

診療の腕を磨く上で大切なことは2つ、経験例を振り返って吟味することと、教科書や文献に当たって軌道修正をすることである。しかしこの2つを不断に続けるのは難しい。経験例が多くても振り返りや読書が不十分だと、偏狭な「オレ流」に陥る。

福井県済生会病院小児科部長の加藤英治先生は、この不断の努力を長年コツコツと続け、たわわに実った小児診療の果実を一冊にまとめた。この本は教科書ではない。診療の現場で気をつけること、診療の進め方・考え方を改めて気づかせてくれる本である。

例えば「腹痛の診かた」の章では、病歴からどのように迫るか、診察からどのように迫るか、診断できない場合は？……と、実際の診療に即して展開し、急性虫垂炎や腸重積症を見逃さないための、著者の経験に基づいたアドバイスが続く。急性虫垂炎の項では、自験例を集計して何をきっかけに診

断に至ったかを丹念に分析している。ほかの章でも自験例の集計と分析が随所にみられ、著者の振り返りの姿勢には敬服するほかない。さらに、教科書や文献から著者が得た膨大な知識のエッセンスが提示される。このように、経験と知識に裏打ちされた記述なので、読んでいると重厚な迫力が感じられてくる。

複数の知人が「読んでいるうちにだんだん引き込まれて一気に読みしてしまう」と言う。これは内容が豊かで痛快なだけでなく、著者の人柄が文章ににじみ出ているからだだろう。よく食べ、よく飲み、よく話す、人の好いエネルギーな彼の文章からは、なんだか元気をもらえる。

写真の豊富さもこの本のメリットの1つで、写真を眺めるだけでも多くを学べる。忙しい診療の中でよくこれだけの写真を撮ったものだと感じる。実は、彼はもっともっと多くの貴重な写真を私蔵

しているが、この本には載せ切れなかったのである。死蔵させるにはあまりに惜しいので、次は写真集を出版してもらえないものかと期待している。

参考書や文献のリストも豊富だが、その1つひとつに著者のコメントが付いているのがありがたい。「この本はイラストが豊富」「家庭医向けだが研修医にもお勧め」など、読者がさらに学ぼうとするときの指標になる。単なる引用源を示したアリバイ証明のような参考文献リストとは一線を画するこの新しいスタイルを、これからの本は踏襲してほしいものだ。

この本は学生・研修医に小児科医の心を教えてくれる。家庭医・内科医に小児診療の落とし穴を教えてくれる。ベテラン小児科医には知識と経験の整理を促してくれる。読んだ後の自分の診療がちょっと変わったな、と感じる好著である。

●A5 頁360 2010年
定価4,200円
(本体4,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01128-0]
医学書院刊